

【研究ノート】

言語運用の実際から見たひろしま型カリキュラム 「言語・数理運用科」の意義

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 教授 橋村 勝明

1 はじめに

「ひろしま型カリキュラム」は、平成18年に公表された「基礎・基本の力の定着に係る学校教育のあり方検討委員会最終報告」（基礎・基本の力の定着に係る学校教育のあり方検討委員会）に示される教育内容を指すもので、その概要は以下のように示されている¹⁾。

「ひろしま型カリキュラム」は、平成18年（2006年）11月に、「ひろしま型義務教育創造特区」として国の認定を受けた本市独自の教育課程であり、平成19年度（2007年度）から3年間の研究開発等での実践研究を経て、平成22年度（2010年度）4月から、全小・中学校で実施しています。

その特色は、主として以下に掲げるものである。

- 小学校と中学校との連携・接続の改善
- 教科の新設
- 小学校への英語科の導入

上記の内、「教科の新設」は現在「言語・数理運用科」として市内の小中学校で運用されている。新教科設置の趣旨について、上記最終報告では以下のように説明している。

これまで、「日本語による言語運用能力」は国語の時間、「数理運用能力」は算数・数学の時間の中で図ることが期待されていた。しかしながら、社会の複雑化、価値観の多様化、情報化の進展などに伴い、様々な文章や資料、数値データなどの多様な情報を、総合的に解釈・分析し、論理的に思考・判断した上で、状況に応じて表現していくことが日常的に求められるようになってきた。(11頁)²⁾

そのような趣旨を充分踏まえつつ、「言語・数理運用科」の意義について、稿者の研究領域である日本語学の視点から検討したい。

2 言語記号と文脈

言語・数理運用科の設置の趣旨に「状況に応じて表現していくことが日常的に求められるようになってきた」とある。状況そのものが多様であることは勿論であるが、表現にも多種多様有り、この組合

せを考えると状況に応じた表現というのは、簡単ではない。そのような意味で、この点に着目したのは非常に意義深いと言える。

例えば、明日の天気について説明する際に、降水確率まで説明する必要があるのか、或いは雨が降らなければ晴れであろうが曇りであろうが構わないという説明で良いのかが状況によって異なるということである。私たちは、日常生活に於いてこのような判断を常にしており、最適な言語表現を心懸けている³⁾。そして、このようなことは習慣的に修得してきたのである。しかし、自らを省みたときに常に最適であるか否かの検証をすることは無い。このことについて、より意識的になれば状況に応じた言語表現が可能となって行くのであろう。

さて、言語の伝達については従来様々な観点から検討が試みられてきた。例えば以下のような会話についてである。

A：明日サッカーしようよ。

B：明日は雨だよ。

Aの発話は勧誘であるので、それに対するBの発話は承諾か拒否となるはずである。しかし、それ以外の天候に関する発話となっており、「言葉通り」理解すると無関係の返事をしていることになる。しかし、常識的に受け止めれば、天候を理由とした拒否であることは明白である。下のような発話がより正確な表現であろうが、現実的ではない。

* B：明日は雨が降るので、サッカーはしないよ。

このように、私たちの日常会話は正確な表現を必要としない場合があり、むしろ多少の省略がある方が適切な表現となっていることがある。一方で、事件事故の目撃者はその状況の正確な再現を求められる。「このことは説明しなくとも、常識的に分かっているだろう」と考えて話さなかったことが、実は非常に重要であったというようなことが生じるのである。私たちの日常会話は、会話の中に全ての情報を盛り込んでいるのではなく、必要な情報のみを精選して効率的に伝達をしようとしているのである。しかし、会話上時として誤解が生じるのは、精選の仕方を誤ったためであろうと考えられる。

以上のように、状況に応じた適切な表現をするということは決して容易なことではなく、またそのために教育の必要性が説かれるのであろうと理解している。

3 数理的現象と言語運用

さて、そのような言語の運用実態と数理的現象とをどのように関連づけてゆくかということについてであるが、小中学校の学修内容である数理的現象は言語で言うところの「言葉通り」で表現されることが多い。例えば、数学の計算式は+（たす・プラス）、-（ひく・マイナス）などの翻訳語をあてて数の加減を説明する。そして、その翻訳語の定義は常に一定でなければならず、状況に応じた定義を許さない。従って、数理的現象をより正確な言語表現によって説明するという関連のさせ方は容易に成立する。

小学校第6学年の学習内容である分数の割り算について、割る数の分子と分母とを入れ替えるという操作について技術的な理解をすることは容易であろうが、その意味について正確に表現することによって分数の割り算の意味を理解することが出来ると考える。そのためには、まず分母、分子などの

用語に対する理解が必要であろう。これは、正確な言語表現をする、あるいは理解をする際に必要となる。数理的表現であれ、言語的表現であれ、まずは語の定義をすることによって理解を深めるということである。

そこで、言語・数理運用科の意義の一つとしては、数理的現象をより正確な表現によって説明する能力を培うという部分にあると言えよう。一方で、言語運用の特性である、正確な表現を必要としない部分を数理的現象に関連づけるような方向性についてはどうか。数理的現象を豊かな日本語表現とどこまで関わらせることができるのか。状況に応じた言語表現能力を育成するという目的からすれば、この部分は無視することが出来ない。

日常の言語運用とは、表現上の曖昧さがありながらも正確に伝達をするということにある。そのことは、数理的現象を説明する際にも同じことが言えよう。例えば、先に引用した新教科設置の趣旨には「様々な文章や資料、数値データなどの多様な情報を、総合的に解釈・分析し」とある。統計を読むということは、一つ一つの数値に拘ることなく大勢を理解するということであろう。このような曖昧さ（データの読み取りとしては正確さ）が日常の言語運用の特性と関わる部分ではないかと考える。

4 生活に根ざした学力とは

私たちの日常生活においては、常に正確な表現と理解が求められているわけではない。一方で、教科教育では正確な理解を求めようとする傾向にある。そのために、常識と教科教育とが乖離することがある。例えば、古典文法の例であるが、下の慣用句を知らない高校生はいないと思う。

働かざる者食うべからず

そして、この慣用句には打ち消しの助動詞が2回用いられており、それぞれ連体形と終止形とを示す。従って、少なくともこの助動詞についてはどの高校生も連体形、終止形については理解しているながらも「ず・ざら・ず・ざり…」という具合に、恰も呪文の如く暗記しようとする。しかも、そのように暗記した結果誤答を招くことがある。既知の情報を活用すれば正答を得られる筈であるにもかかわらずである。

また、他の例では、広島方言には以下のように表現することがある。

今日あそびに行くけー、家におってな。

広島方言話者に、「けー」についてその意味が分からないという話者はいないだろう。勿論、原因・理由を表す「けー」である。しかし、現代文法を学習した中学生が品詞、接続などについて説明をすることは困難かもしれない。

教科教育と日常生活とが離れているために、教科教育の知識を生活に生かすことができず、また、生活上習得していることがらを教科に生かすことができない。ひとつのモデルを理解することと同時に、生活根ざした表現を理解するというのではないか。そこで、生活に根ざした教科教育が望まれるのである。

例えば、以下のような問題について検討する。

【問題】

宿題を、昨日は1時間、今日は3時間したところで全体の3分の1が終わった。宿題を終えるま

であと何日かかるか。

【答え】

4時間で3分の1完了しているので、標準的にはあと8時間である。それが何日かかるかは、詰めて取り組めば8時間なので1日でできる。1日1時間とすると8日間である。しかし、この2日間で4時間のペースであると考え、1日2時間が平均であるので、あと4日間である。

上の問題と答えは、日常生活においては以下のような会話で表現される。

A：あとどれぐらいで宿題出来る？

B：大体4日くらい。

この会話は極めて自然なものであると良いと思う。寧ろ、【答え】のような発話をするの方が希であろう。上の問題を数学と捉えるかどうかの見方の問題はあがるが、日常は数学的な判断で満ちていることが伺われるのである。

5 まとめ

ひろしま型カリキュラムに於ける、数理・言語運用科の意義とは、一つには数理的現象を正確に表現する言語の活用を身につけるといふ部分にあるが、一方で言語の曖昧ながらも正確に伝達できるという特性を活かした数理的現象の理解にあると言えのではないか。そして、その部分に日常生活と教科教育を繋ぐということが垣間見えるのである。

これは、数理・言語運用科に限ったことではなく、このような考えは教科を架橋するという意味に於いては学習指導要領における「総合的な学習の時間」に活かせるものであると考えるのである。

注

1) 下記広島市 HP に掲載されている。

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/00000000000000/1245286101944/index.html>

2) 最終報告書は、下記広島市 HP に掲載されている。

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/00000000000000/1145938922277/index.html>

3) H. P. Grice の協調の原理や、D. Sperber & D. Wilson の関連性理論などで説明される。詳細は小池生夫編集主幹『応用言語学事典』（研究社、2003年4月）の当該項目や、D. スペルベル/D. ウィルソン著、内田聖二他訳『関連性理論—伝達と認知— 第2版』（研究社、1999年3月）等を参照されたい。